# 大地震ゟ付義捐金募集廣告

安政の江戸大地震は早や三十七年の一昔と爲り當時の有樣は今尙ほ故老の語る所にして一夜忽然寂耳に水の大震動、地震に遭ふて地震たるを悟らず七轉八倒の間に煙焔濤市に張り親が子を見殺にして泣くあれば妻が夫を求めて叫ふあり走て土蔵の鬼瓦に頭を碎かるゝ者あり梁に足を敷かれて燒死ぬる者あり市中近郷幾萬戸の燒失、幾萬人の死傷、大都變して古戰場と爲る其物語はいよ〳〵聞ていよ〳〵恐ろしけれども唯むかしの事として聞流かせしに何ぞ料らん今回は岐阜大垣名古屋を始めとして何十里内一面の地方に正しく江戸の大地震を再演して修羅の慘狀を呈し今到來の電報通信接していよ〳〵其事情を詳にすればいよ〳〵酸鼻に堪へず然かも其日は本月二十八日にして舊暦の九月二十六日に當り安政二年の變は十月二日のみとあれば前後七日の相違にして二度の天災とは三十七年久しと雖も目前に見るが如し左れば當府下を始めとして遠近の地方にて苟くも慈善の志あらん人々は奮て懷ひ今を憐み多少の金を捐てゝ被害地方の死亡者負傷者貧困者を救ひ給はらんことを切望に堪へず但し其義捐金は當時事新報社に當て現金にても爲替にても到着次第これを取纏めて其筋に使用法を托し又その義捐者の姓名と金高とは時々本紙上に記して請取書に代ふ可し

一義捐の金高は一口十錢以上の事

但し郵便切手代用は謝絶、尙ほ爲替振出先ときの郵便局は東京芝口郵便局に限る

一義捐金請取の期限は來る十一月十五日までの事

東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地

明治二十四年十月二十九日　時事新報社

## 時事新報

### 震災救助の手段未だ十分ならず

岐阜大垣名古屋等の震災地より續々到着する電報通信を見るに其慘狀は益々甚だしく實に心膽を寒からしむるもの多し我輩は過日事變の報道に接するや否や取敢へず筆を執り政府は臨機の處分を以て至急に救助法を施して然る可き旨を述べたりしが其後如何に議決したるや未だ承知せざれども兎に角に事の迅速活潑あるを最第一の要なれば實地の情況を視察して然る後にあらざれば到底多少の不都合手違ひは覺悟の前として匆々に着手し唯眼前の饑餓流離を救ふて後日に憾を遺すことなきを所望するのみ畏くも天皇皇后兩陛下には災變を聞し召されしや直に三千圓つゝの恩賜あり引續き更に一萬圓つゝの增與ありし程の次第なれば社會の上流に在る貴族紳士貴婦人の類も今は默止す可き場合にあらず平生無事の時にさへ病院慈善の爲めなど稱して樣々に義捐を募集するの例もあることなれば今度は更に一層の盡力ありて然る可し又寺院の僧侶の如きも斯る場合こそ其大慈大悲の功德を事實に現はす可き機會あれば我輩は特に其運動の如何を見んと欲するものなり然るに數日來今日に至るまでの實際を見るに僅に二三の新聞社が義捐金の募集に着手したると赤十字社より數名の醫員を派遣したる等に過ぎず我輩は救助の目的の廣くして且急なるにも拘はらず唯今の處にては其方便の些少にして然かも緩漫なるを憾む者なり

或人が募集の方法を樣々に工風して本社に寄せたるものあり今その二三條を左に記さんに

一貴族紳士貴婦人は銘々發起して同社會中の義捐金を集むるは勿論、遠く慈善會を起して募集に盡力する事

一府廳にては郡區役所に出張所を設け五錢以上の義金收納場を開く事

一僧侶は其寺院に於て大施餓鬼又は大法會を催して其收入を義捐する事

一芝居寄席の類は直に慈善演藝を興行し其收入を義捐に充る事（淺草の市村座にては市川左團次等の發起にて十一月四日より三日間の上り高を義捐するよし廣告したり）

一淺草上野等府下大小の遊覽場は勿論汽車、鐵道馬車、旅館湯屋、理髮店等には震災義捐慈善箱一個づゝを置き幾錢幾厘を問はず有志者に投入せしむる事（是れは警視廳にて造り夫々へ與へ其筋にて監視するも可あり）

右は唯或人の思付のまゝにして尙ほ此外に種々樣々の方法ある可しと雖も人々の工風に任ずるみとして差向き急要あるは唯金圓のみに限らず此般の罹災者には衣服器具等の欠乏に困しむもの必ず多きみとならんあれば貴族紳士の家にて衣服夜具等の既に不用に近きものあらば其種類を擇ばず唯あるに任せて之を見繕ひ又日用の器具等も不用のものを同樣に取纏めて贈る可し一枚の古布子一個の茶椀も千金に直するみとある可し或は之が爲めに有志者は古着古道具の募集所を設るも可あらん

安政二年江戸の大地震に遭ひたる者は今に其慘狀を記臆して忘れざるみとあらん今日の擧理上に於ては未だ地震の豫報器あるを聞かざれば明日にも安政度の如き災ありて其慘狀を再演するやも圖る可らず萬一にも斯る事變のあるに際すれば府下百萬の市民は他の同胞の救助を仰がざるを得ざるみとあれば市民たる者は今回の震災を他人の事として無情視す可らず即ち人間世界相互の事なり先年白耳義に於て火藥製造所破裂して數百人を殺したる時に巴里の市民は無靈講を起して義捐金を集め又倫敦の知事は救助講を催して同じく義捐したるみとあり西洋諸國には此類の義擧、挙げて數へ盡す可らず非常の災變とあれば他國のものに對しても尙ほ且斯くの如し況んや同國同胞の人民に於てをや救助の手段一日も猶豫す可らざる中にも東京は日本の帝都にして第一位に位するものあれば他に率先して全國人民の模範たらんみと切望に堪へざるなり

今日迄に調査されたる當地の倒潰家屋、死傷人員等は毎度通信員より報知したれば讀者は略ぼ已に大體の情況を推察して其不幸を哀むと同時に定めて事の意外なるに驚きしあらん抑も我輩は初めて東京を發するや僅かに其筋に變報ありし位にて確とした事實を知るに由なかりしかば取敢へず實況觀察の途に上りは上りたれども心の中には左程の事にもあらざる可しと思ひたるに函根を越えて愈々西するに及び或は汽車乘合客の話を聞き或は旅亭の主人が語る所を聞くに一として我想像の外あらざるはなし而も其汽車中の談話の如きは通常の場合と異ひ如何にも濕氣を帶びたり蓋し此汽車中の旅客は概ね皆尋常の旅客にあらず何れも胸の中には容易ならざる心配を持つ者たるを知る可し此中には最愛の妻子を失ふたる人もあるべく慈愛ある父母に別れたる人もあるべし前後の思案に暮れて發する言語の並ならぬも臓に道理あり斯くて余は益々震災の尋常に非ざるを知り其未だ慘狀を見ざるに先ち早くも已に慘憺の情に堪へざる者ありし

次第に西すれば次第に其話のみにて遂に參州岡崎以西に到れば往來の道の裂けたるを目擊せり蓋し其中には縦横十文字に裂けたるもあり甚しきは巾五寸に深さ一尺のものもあり其長さの如きは長短種々あれども一見人をして破慄せしむる者あり斯くて名古屋に近くに從ひ漸く路傍に倒れたる家多く其慘狀言はん方なし僅民尙ほ未だ堵に安んずる能はず男となく女となく只茫然として此處彼處に彳み生活を營む者とては殆んど稀にして偶ま力あげに立働く者あるも亦只只潰れたる家の始末を爲すか左もなくば難を避くるが爲めに假住ひする戸板圍の小屋を造らんとするに過ぎず總じて往來の左右には軒並に右の如き避難がてらの路後ぎを爲したるを以て宛ら緑日の如くあれども只何處となく寂れたるみと是非もなし

以上は途次の見聞を略記したる者にて是より本題に掲げたる震災後の名古屋を記述して眼の當り此慘狀を見ざる所の讀者に報道せんとするの考あれども今夕（卅日）漸く當地に達したるのみにて碌々探聞も遂けざるゆゑ眼に見ゆる事實の外は差向報ずるに由なし左れば先づ一寸聞見したる有の儘の處を記さんに總じて往來の左右より倒れたる家は道巾を狹めて帶程にあし剩さへ其處此處に落ち散りたる壁土抔の未だ全く片附け果せざる者さへあり下物壊さみと限りなく製造所とも覺しき煉瓦造の家は家根も壁も籠の目の如く透き通りて僅かに昔の殘骸を止め夜廻り火の用心と稱して拍子木を鳴らし聲を擧げて遠近に和し、寄り集たる子供等は石油の空箱を引廻し叩き廻して何處となく景氣を添へたるは恰も祭禮の如くあれども是れも亦前記の緑日と一般にして矢張物寂れたるを免れず偶ま破壊の雖を逃れたる旅籠屋あるも通常の客とては更になく只纔かに實況觀察として寄り集ひたる新聞記者の屯に過ぎず其他の商賣とても概ね皆然かり天事人事總て是れ慘あり と云ふの外なし加ふるに今も尙ほ輕震の絶間あく一日は愚か一時間の内にさへ其何回あるを知らず人心の安んぜざるも無理ならぬ事と云ふべし尤も斯く云ふ時は名古屋全市すべて破壊に歸し何も角も人間世界に非ざるが如くなれども此際全きを得たる家も少からずして之を彼の岐阜、大垣に比すれば尙ほ以て不幸中の幸たるもの多しと聞く況んや官民擧りて人事の警戒に怠りなく人心の安頓して天事の金城たる名古屋實況の慘あるに驚かれたれば以後は專

○知事の告示　今知縣知事は左の告示を發せり

今般非常の震災名狀すべからざるものあるからん故にして此機に乘じ人心を惑はし流言飛語を放ちて人心を動搖せしむるの事あるべきも萬一心得違ひの者あらば厳重に取締ることを意致すべし云々

○震災概表　去二十八日に出火所々にあり方一ノ宮、岩倉等壊滅堤塘の陷崩橋梁も其最も強きは尾張

| | 死 | 傷 |
|---|---|---|
| 名古屋 | 一七〇 | 二〇〇 |
| 愛知 | 二 | 一 |
| 東春日井 | 三 | 二 |
| 西春日井 | 二 | 一 |
| 丹羽 | 七 | 二 |
| 葉栗 | 二 | 一 |
| 中嶋 | 一 | 一 |
| 海東 | 一 | 一 |
| 海西 | 一 | 一 |
| 碧海 | 一 | 一 |
| 幡豆 | 一 | 一 |
| 賀茂 | 一 | 一 |
| 額田 | 一 | 一 |
| 宝飯 | 一 | 一 |
| 渥美 | 一 | 一 |
| 合計 | 一七〇 | 二〇〇 |

○地震前夜の氣候　おかりしが兎に角し程ありしと云へ震の後午前十一時しと云へり

○三重縣下の地震　同地は去月二十八日俄然震動を始め三度より次第に震力を加へ三秒に至るまでも三十五秒に至る間の周章狼狽云はんもあらざりし程なるに少なく倒壊若くは出でざれども石垣抔多く或は道路の龜裂したるものは多少ありし方に最も甚しく桑名にて壓死一人、負傷化造りの電信局と爲り其他建物の積會社の各工場と煙突も同樣崩壊せ棟、土蔵家屋の既所、負傷三四名位

○司法省告示第百一號

名古屋地方裁判所管内名古屋區裁判所枇杷嶋出張所破壊ニ付同出張所ノ管轄ニ屬スル登記事務ハ當分ノ内名古屋區裁判所ニ於テ取扱フ

明治二十四年十一月二日　司法大臣子爵田中不二麻呂

## 官報

## 雜報

○震災後の名古屋

十月三十日夜　特派通信員　柳莊太郎

去る廿八日の震災は名古屋、岐阜、大垣等に慘害の最も甚しかりし畢は着く已に世間に知れ渡りしのみならず

○上野發　午前六時、八時十二分、十時五十分、午後一時、三時十三分、五時十分、七時十分、十一時十四分、午後四時十九分、七時十分、十一時十五分、午後三時、七時三十分●高崎發（小山〇）午前五時十分、十時十五分、午後二時十分、五時十分●前橋發（小山〇）午前六時、十時、十時十五分、午後二時、五時十分●熊谷發（小山〇）午前六時、十時、十時十五分、午後二時、五時十分●小山發（宇都宮日光〇）午前六時、十時、十時十五分、午後二時、五時十分●水戸發（小山〇）午前六時、十時、十時十五分、午後二時、五時十分●宇都宮日光發（小山〇）午前六時、十時、十時十五分、午後二時、五時十五分●宇都宮日光發（日光〇）午前五時、二十分、十時、十時十五分、午後二時、五時十五分●宇都宮日光發（宇都宮〇）午前五時、二十分